琉球大学学術リポジトリ

［COE教員の研究紹介］イリオモテヤマネコの頭骨にみる小島嶼適応

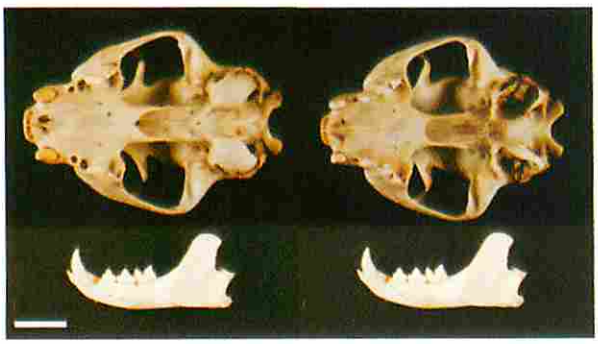
メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学21世紀COEプログラム広報委員会 公開日: 2008-08-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中西, 希, Nakanishi, Nozomi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/6935

イリオモテヤマネコの頭骨にみる小島嶼適応

中西　希（生態系の多様性研究グループ）

イリオモテヤマネコ *Prionailurus bengalensis iriomotensis* は琉球列島に生息する唯一のネコ科動物であり、小島嶼に個体群を維持してきた理由として、西表島（284km²）の動物相の豊かさと本種の幅広い食性があげられている。また日本にはイリオモテヤマネコの他にベンガルヤマネコの別亜種であるツシマヤマネコ *P. b. euptilura* が長崎県対馬（710km²）に生息している。両亜種共に生息地は島嶼であるが、その食性は大きく異なることが糞分析からわかっている。ツシマヤマネコが大陸に生息するベンガルヤマネコと同様に小型げっ歯類と食虫類を主な餌としているのに対し、イリオモテヤマネコはある分類群に偏ることなく、哺乳類、鳥類、両生類などの様々な動物種を利用している。このような生息地による食性の変異は、各々の生息地の餌動物相によって大きく影響される。また、餌動物種のサイズや生態によってヤマネコの狩猟行動にも差異が現れることが予測される。

これまでに、イリオモテヤマネコとツシマヤマネコの犬歯の太さや頭骨形態における変異を観察し、イリオモテヤマネコは他のベンガルヤマネコと比べ餌動物が異なることによって、狩猟行動や咬合機能が異なった結果、頭骨形態に独自の進化をおこしたことが予測された。



イリオモテヤマネコ（左）とツシマヤマネコ（右）の頭蓋と下顎（スケールバーは2cm）

そこで，イリオモテヤマネコの在来地上棲小型哺乳類を欠いた小島嶼への適応を、同じ島嶼に生息するツシマヤマネコの食性や狩猟行動などの採餌生態と頭骨形態の比較から明らかにすることを目的として研究を進めている。

この解析の中で重要なファクターとなる食性について、これまで用いてきた糞分析法に加え、交通事故死亡個体から摘出した胃内容物を用いる。胃内容物分析は実際に数時間内に捕食した餌動物構成を得られるため、食物中の各餌動物種への依存度を知ることができる。さらに、胃の中の餌動物各個体の状態からヤマネコがそれぞれの餌動物をどのように狩猟し、咀嚼しているのかを確認することにより採餌行動パターンを予測することができる。今後、頭骨計測値を用いた頭骨形態や咬合力の比較を行い、採餌パターンと合わせて考察することにより、イリオモテヤマネコの小島嶼適応を明らかにしていく。

イリオモテヤマネコ

ツシマヤマネコ